R7 楡木小学校　学校通信
No.１１
なりたい自分になる！
In 楡木サラダボウル
令和７年６月１３日
文責　余宮

不審者対応児童引き渡し訓練にご理解、ご協力いただき、大変ありがとうございました。

感性の教育

先日、広島交響楽団のオーケストラ演奏を、全校で拝聴しました。大変感動しました。大音響もさることながら、床から直接響いてくる振動、耳までは聞こえないんだけどひしひしと感じる演者の息遣い…総勢７０人ほどの生の演奏ならではの空間に心を動かされました。

子どもたちもその迫力に驚いたようでした。

「なんか！すごかった！！音が！！！すごかった！！！！」

言葉にならない感動が、演奏直後からたくさんのところで聞かれたのも、納得です。

このような、「知る」とか「学ぶ」の前におこる、これら言葉にならないけれど確かに人が感じているものを「感性」と呼びます。つまり、今回の音楽鑑賞とか授業、友達とのかかわりなど、人が環境とまず直接触れ合い認識する部分が、感性という訳です。

様々に分岐する岐路が広がる未来。しかし、人は生涯一本の道程しかたどることはできません。無限に迫りくる IF（選択）を、人は意識的にもしくは無意識的に判断し、一本だけたどる。その判断の数は１日３万５千回！（諸説あり）だとか。おびただしい数の判断を、人は毎日繰り返しているのですね。それも、ほとんどが無意識的に。そう考えると、岐路に行われる判断のよりどころは、環境とのファーストタッチに当たる感性であることがほとんど。このことを踏まえ、愛知教育大学の藤江充先生は、感性を「人が環境と関わりながら、自分を創っていく能力」と説明されています。なるほど、これは大げさでもなさそうだ。

だから、これからは感性を育む教育が大切だと、藤江先生は次のように述べられています。

> 要は、最初に受け入れる部分が感性ということです。子供は「どうして？」「なぜ？」と盛んに聞きますよね。子供はわからないことや、無関係に見えるものを結びつけることから、自分なりの見方・考え方を身につけていきます。

個性的な問いや学びは、その子どもなりの見方・考え方が大きく寄与しています。その見方・考え方を創るもとになるのが感性である、という鋭い洞察です。

感性はとても大切だ。とは言え、その感性を育てる、学ぶのは非常に難しそうです。なんか、性格や生まれつきじゃないのかな？う～ん。

もちろん、性格や生まれつきなどの生得的な面が全く関係していないとまでは言い切れないでしょう。それでも、感性は育てうるものであると信じたい。

では、感性をどのように育てるべきなのか。

藤江先生によれば、感性は「分ける」「つなげる」「広げる」という観点から捉えられる、と述べられます。紙面の関係で簡単にしか説明できませんが、「分ける」は分析、「つなげる」は異なるものに共通点を見出すこと、そして「広げる」はこれまで受け入れられなかったものを受け入れるキャパシティーのことだそうです。私なりに解釈すると、まずは感じたことを流さない。そして、自分の感性がなぜそこに引っかかったのかを考える。友達と対話する。本を読む。そして新しい経験に挑戦する。やってみる。広がる世界。こんな感じ。

なんだかよくわからないなあ～という声が。う～～ん。ごめんなさい。今回は、感性で受け止めてください！[Don’t think. Feel!]※

あれ?分からん??古い???だめ????

※[Don’t think. Feel!]は、あのブルース・リーが映画「燃えよドラゴン」で言ったセリフですね。本質を見据えれば、言葉がわからなくても真実にたどり着けるはず、とリーが武術を訓練している弟子に述べた言葉です。公開当時から、大変話題になったセリフでした。

とはいえ、映画公開が 1973 年・・・私が 2 歳の時でした・・・・・